

# 宮崎県におけるシイタケ害菌（シトネタケ、ニマイガワ等）の被害調査について（第Ⅱ報）

宮崎県林業試験場 近藤 一稔  
川越 頼光  
植野 泰久

## 1. はじめに

シトネタケ、ニマイガワ等シイタケ害菌の被害調査については、昭和56年度から着手している。初年度は、本県の東臼杵農林振興局東部指導区管内を実施し、その結果は、第1報として報告した。昭和57年度は、同農林振興局管内の西部指導区の2村について、同調査を実施したので、その結果を報告する。

なお、この調査の実施に際し、県林業振興課、日高主任専攻、県東臼杵農林振興局、横山主任、増永主任技師、田中技師、下沖技師、甲斐（良）技師、清水技師、甲斐（正）技師にご協力いただいたことに対し厚くお礼を申し上げる。

## 2. 調査内容

### 1. 調査地区および調査カ所数

宮崎県東臼杵農林振興局西部指導区管内（図-1）。A区：椎葉村，7カ所。B区：諸塚村，9カ所。合計16カ所の調査地を選定し、各調査地区内において、平均的な環境にあると思われる伏込みを1カ所選び、50本を抽出して調査木とした。（表-1）



図-1 昭和57年度害菌被害調査地

被害率の調査は、原木の表皮が剝離されて露出した害菌子座面積が、原木表面積に対して占める割合を肉眼で判定し、調査地区別、原木の径級別の被害本数率

および被害蔓延率を求めた。

### 4. 害菌の被害との関連調査事項

(1) 原木の生育環境および伏せ込み地の環境。(2) 原木の樹齢と乾燥度 (3) 伏せ込み (4) 管理等。

### 5. 調査期間

昭和57年11月17日から同月19日までの3日間

## 3. 結果

### 1. 調査地区と調査木

調査地区別の調査木および径級別内訳は、表-1のとおりで、比較的小径木の占める割合が高かった。

表-1 調査カ所別調査本数

調査地区	調査カ所数	調査本数	径級別内訳		
			小径木 (7cm以下)	中径木 (8~12cm)	大径木 (13cm以上)
A	7	350	223	107	20
B	9	449	208	156	85
計	16	799	431	263	105

## 2. 被害率

### (1) 調査地区別被害率

1) シトネタケ：被害本数率は、A区17.4%。B区31.2%。被害蔓延率は、A区2.17%。B区3.81%で、いずれについても被害率は諸塚村が椎葉村より高かった。（図-2）

2) ニマイガワ：被害本数率は、A区5.7%、B区1.6%。被害蔓延率は、A区1.0%、B区0.43%で、被害率は、椎葉村が諸塚村よりやや高い傾向がうかがわれた。しかし全体的に被害率が低いためはっきりしない。また、椎葉村、諸塚村いずれにおいてもシトネタケの被害がニマイガワより大であった。（図-2）

### (2) 原木の径級別被害率

1) シトネタケ：表-2に示すとおり、本数率、蔓延率いずれでも、また、椎葉村、諸塚村いずれの調査地区においても、小径木の被害率が中径木より高い傾向を示した。

2) ニマイガワ：椎葉村では、本数率、蔓延率い

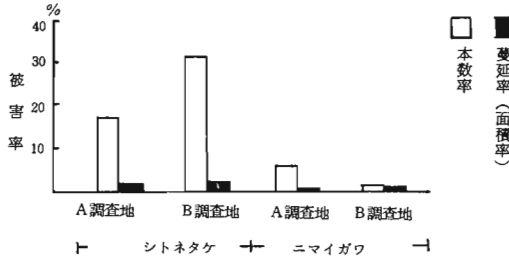


図-2 調査地区別被害率

れをみても、小径木の被害率が大径木より高い傾向を示した。諸塚村では、中径木の被害率をもっとも高く、椎葉村と異なる結果を示した。

しかし、両調査地区とも、大径木の被害率は0であったことから、本被害も小、中径木に多く大径木に少ないことがうかがわれる。

表-2 原木の径級別害菌被害率

害菌被害率 調査地	シトネタケ被害率				ニマイガワ被害率			
	本数率		蔓延率		本数率		蔓延率	
	A区	B区	A区	B区	A区	B区	A区	B区
径級	%	%	%	%	%	%	%	%
小径木	23.3	38.5	3.05	5.17	8.5	0.5	1.59	0.17
中径木	6.5	28.2	0.61	2.95	0.9	3.9	0.14	1.03
大径木	10.0	18.8	0.75	2.06	0	0	0	0

注 A区：椎葉村。B区：諸塚村

3. 害菌被害との関連調査

1) 原木の生育地および伏込み地の環境と被害

生育地および伏せ込み地の位置、方位、標高、傾斜、土壌型、通風、乾湿等と被害との関連性は、判然としなかった。

ただし、伏せ込み方法との関連性については、調査カ所数に対する被害カ所数百分率でみると、シトネタケ、ニマイガワいずれも、野伏せの方が林内伏せよりやゝ多い傾向がうかがわれた。(図-3)

2) 原木の樹齡および乾燥度と被害

樹齡および乾燥度と被害との関連性は、比較した結果判然としなかった。

3) 原木の作業工程と被害

作業工程と被害との関連性は、原木伐採後の葉枯し期間が60日以下と以上とでは60日以上経過した原木の被害率が高い傾向を示した。

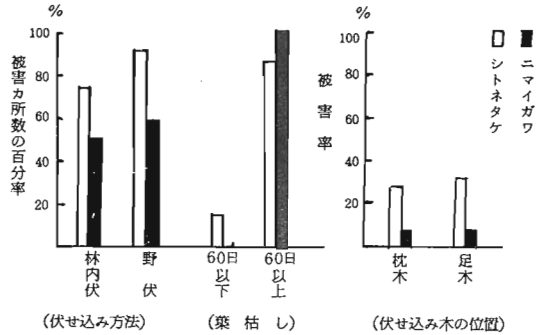


図-3 原木の伏せ込み条件と被害率

4) 原木の伏せ込みおよび管理と被害

伏せ込み型、伏せ込み高さ、伏せ込み密度、伏せ込み原木の位置および伏せ込み管理等と被害との関連性は、比較した結果判然としなかった。

5. 考察

以上の結果が示すとおり、椎葉、諸塚いずれの調査地区においても被害蔓延率は、両害菌ともそれほど高くなく、ニマイガワは比較的良かった。

しかし、被害本数率では、シトネタケが平均25.2%と比較的高く、多くのほた木が本害菌に侵されていることが明らかになった。

また、両害菌の被害は、葉枯し期間が60日以上経過した原木および小径木に多いことから原木の乾燥し過ぎが、被害発生の誘因の一つと考えられる。

なお、関連調査の中では、調査事項と被害との関連性が判然としないものが多かったが、このことは調査件数の少ないことにもよるであろうが、また、このことから本害菌は、環境に対する適応性の強い性質のものと推定される。

引用文献

(1) 近藤一徳他：日林九支研論，36，287～288，1983